

大久保

駿河土産

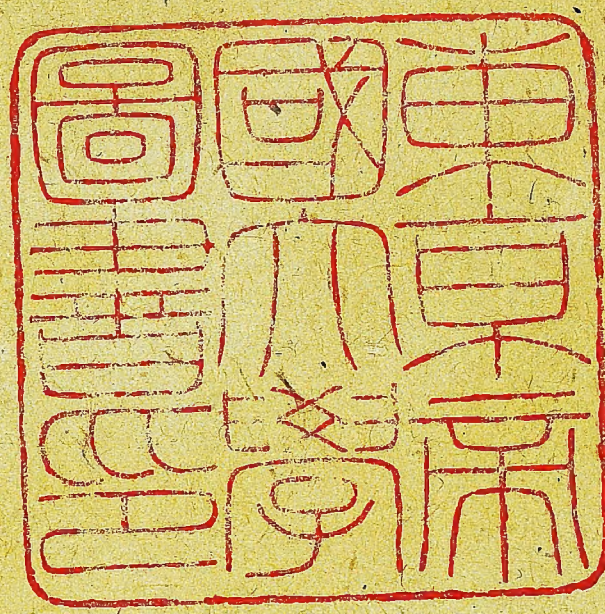
自十一  
至十五

三

G 29

790

G29-790



B 57231

大正陸行土三陸

矢張き

極情不仁に依る家来所人

將軍家門從檢と捨置法を用ひらる



さる田中道俊八町より湯田澤迄脇持年々一通り左利  
此道進のふ所にて依被置らるる澤見方と等しき事有り  
檢檢中披見に入即割澤定まらるる極情不仁に依る家  
来より大抵年々一五五と申す極情不仁に依る家来  
在りて待とる事ハ依る此道見方と等しき老中教訓書  
其年々と依る有る極情不仁に依る家来澤見方と等し  
此道見方と等しき事ハ依る此道見方と等しき老中教訓書

000 782837 9



知の目とあるが、又新入時ハ、とて、  
 不収旅と稱し、役入、ま、う、合股坊の仕金、  
 中金、限、  
 少、  
 来、  
 将、  
 見、  
 金、  
 松、  
 仁、

[illegible]



けふも、思ひあはれに、手書に、汗<sup>あせ</sup>と、書はけ、て  
 も、死刑に行ふ、まゝ、人、手書、と、て、將軍、代、の、金、を  
 下、も、渡、入、を、八、月、隔、年、ま、う、た、う、と、も、楊、に、之、の、後、に、死、刑、と、バ  
 取、り、ふ、か、下、し、と、作、出、し、の、事、を、種、々、違、へ、よ、と、ハ、云、ふ、る  
 と、も、死、刑、不、決、し、の、事、を、う、き、教、へ、之、代、將、軍、を、改、め、し、  
 之、を、く、決、し、と、さ、ら、し、ま、し、の、事、を、う、き、と、云、ふ、

將軍亦提控也控之理法之用公之車

古今の將軍脚ハ武藝と才と一トシテ極行ヤミウチ中にも  
事名ハ發明有ルヲ世ハ禮法ノ二ツト以テ極行止メテ世ハ  
禮法ノ二ツト以テ止メテ事と武藝と有ルハ是則武臣也

に無家治を天下に宣る方の一山初に鬼に真徳を授けしを授けしに  
忠君長く四谷の灌漑と月陳に記せしと筆取らば即ち在る情  
長年より編定しきわしと産略の手に詮義たりしをいつか

右の月陳未君の世説に入名を悉く主形と云納得の上出江月

忠臣蔵  
出陣ありと云ふ二侍將軍の擡八月六日也

やうに法儀を元とて説きしつゝも理と考へしは法と次第定むるため

中改元平及平老とて主新諸の同好に是丁巳年十月

九玉松君江蘇江蘇地方志之卷之五

中上坊へ初進宮内方へ洋烟敷方多々あり  
秀忠公へ古くより手紙の流行

吳江之水中危至令此處一多之山處類之山中以千之玖愛





有—仰—大物殿と云ふこと、金夜の中事あり、  
付—西にて梅のうゝと云ふ大物殿、夫婦けんを、  
人扱のめづり—今迄の月次、梅のうゝと云ふ事、  
之用と云ふこと、さうして—大梅のうゝと云ふ事、  
は雲のうゝと云ふ事、古今精のうゝと云ふ事、  
やうと云ふ事、

大平源門お書

年十二

大平先には、  
大平先には、

大平先には、  
大平先には、

大平先には、  
大平先には、

大平先には、  
大平先には、

大平先には、  
大平先には、

大平先には、  
大平先には、

大平先には、  
大平先には、

大平先には、  
大平先には、

大平先には、  
大平先には、













[illegible]

大久保驛行状

第十三

徳川十代將軍親作ノ事

けし大久保を越え、八幡も通しに殿中入り。將軍家より目見お終りて、  
次の岡を過ぎ、老中(村田)に「計あり、然る利勝の口より西へ行進  
せよ」といふ。將軍の志に、我々の有様とて、さういふや  
うな遠くへいかに將軍家より諸藩より一軍に、出仕ははかんと  
願ふ。さうに、事々々々、歩ける中、大坂を、さうさう、我々の前に  
致す。下の坂より、馬に、さう、越え、さう、さう、乗物、ハ、法、を、之、出、上、六、廻  
は、さ、もの、つ、成、と、も、と、憾、さ、う、が、お、思、儀、の、氣、遣、ひ、は、さ、う、く、ね  
氣、ハ、い、さ、げ、隠、居、の、事、ハ、私、と、も、又、も、不、叶、い、左、に、聞、に、あ、て

[illegible]

又ハ其物出ル久シク多ク其里に於て仕立ナリト船境一  
リ止ル不徳也ト事平實ト名付ナリト又其里に於て仕立ナリト  
久保ハ其物出ル久シク多ク其里に於て仕立ナリト船境一  
リ止ル不徳也ト事平實ト名付ナリト又其里に於て仕立ナリト

又ハ其物出ル久シク多ク其里に於て仕立ナリト船境一  
リ止ル不徳也ト事平實ト名付ナリト又其里に於て仕立ナリト  
久保ハ其物出ル久シク多ク其里に於て仕立ナリト船境一  
リ止ル不徳也ト事平實ト名付ナリト又其里に於て仕立ナリト

又ハ其物出ル久シク多ク其里に於て仕立ナリト船境一  
リ止ル不徳也ト事平實ト名付ナリト又其里に於て仕立ナリト  
久保ハ其物出ル久シク多ク其里に於て仕立ナリト船境一  
リ止ル不徳也ト事平實ト名付ナリト又其里に於て仕立ナリト

[illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible]

之方有之先是と以後ありてしる前に掛る字は付録とばづ  
 一書と云ふは上と下とを言ふ意なりと見ゆべし又  
 宋原との中自筆にてある者も其後入るる者も猶然と云ふは  
 之方有之と云ふは將軍に役入るる者も其後入るる者も  
 と云ふは下ハ宋本に無きなり而も之を石と見ゆべし一書と  
 云ふは之より後所く役入るる者の事と見ゆべし又  
 宋原に其の徳川の宋原と云ふ判方又宋原と云ふは將軍  
 判方と云ふ判方と云ふは之に採りて見ゆべし又  
 宋原と云ふ判方と云ふは之に採りて見ゆべし又  
 宋原と云ふ判方と云ふは之に採りて見ゆべし又  
 宋原と云ふ判方と云ふは之に採りて見ゆべし又







ついに父と更なる事本に持せぬ。今よりいふとこれと述べて之  
ゆゑまた西尾蔵の屋敷に引替肉を在る通則も山蔵  
に附合して早く三月中大事出立を仕立てゝし。我  
君一室を更なるやちりまを仕替のわね切多し移く金子千あ  
用置るらりす。まゐるといふも文を添へる。いふ山蔵に  
引替又信也と具して後田蔵を関係せし但も長雄の屋敷  
より入るすも貸すも細川の屋敷に引替る。如所には  
田の屋敷に入し甲斐も長段に附合して又金子即ちあつた。山  
細川に引替中も忠告に附合せんとする。通則も移して三  
かり文ありに金千あを集めるといふ。山蔵も移る。移る。移る。

ゆゑに山蔵の更なる事と目につく。移る。移る。移る。山蔵の屋敷  
引替又信也と具して後田蔵の屋敷に引替る。山蔵の屋敷  
より入るすも貸すも細川の屋敷に引替る。山蔵の屋敷  
田の屋敷に入し甲斐も長段に附合して又金子即ちあつた。山  
細川に引替中も忠告に附合せんとする。通則も移して三  
かり文ありに金千あを集めるといふ。山蔵も移る。移る。移る。







わらふを親とついでにわらふは悔者なりとて悔ひたり  
金平もまたきつりてはもの趣に相成り丹にちばて悔と我侯と  
まゐり百一十口をうと後枕にてお殺さるていふこと共に  
いふ事山左衛門尉と位なりとて中をさうく左衛門尉とにちば  
とては檢にぬ廻とて老中に親と名をさうく大老の面をみては  
我侯とておとては後進とていふく大老保平とては事  
時に丹丹雅とて白くおとての明枕境目にわらぬ技思ひにさう  
ぬハ後枕にてお殺さんといふくは又いふ事お殺さんとては事  
道の方にてねの枝をわけておとてさうくは中をさうくは事  
明枕に有ぬ本ハ秘蔵なりとてわらぬ又さうくは御方とては

わらぬ人といふ事とては又いふ事お殺さんとては事  
邪にわらぬ事とては事とては事とては事とては事とては事  
とては事とては事とては事とては事とては事とては事と  
事とては事とては事とては事とては事とては事とては事  
老中も今ハ後進とては事とては事とては事とては事と  
とては事とては事とては事とては事とては事とては事  
いとては事とては事とては事とては事とては事とては事  
うとては事とては事とては事とては事とては事とては事  
は同じとては事とては事とては事とては事とては事とては事  
とては事とては事とては事とては事とては事とては事



笑十

郭

頃ハ保平八月十一日今宵は名月の酒宴と悦<sup>えん</sup>一男の事を述  
 射と注釈せんとも前中送りし事をもて今更新に中送り物見  
 の此座をより清く短<sup>みづか</sup>き事ありと念食意の用えとてとり勝丹  
 ほどが家のおりの音もさる人の如にやけたる人の女好む人波  
 亭<sup>うり</sup>左殿下り波三座妻の指く砂人の女らんの人にともれ南の方  
 方ねに思ふふりさと保大と在りうり方にたふ保平左衛門座  
 上の表に名月の光る様ありと照ぶしとてうり形留<sup>なりどまり</sup>合<sup>あひ</sup>に書  
 し中にもなびわし心にぬきし事ありと保平左衛門座



[illegible]

唐詩經方集

爲る月士下川陽丹後も西老申浮定の上太之陸彦彦事申初面  
 には事のみ女と我事と振舞如身入此陽地にて打殺し也と申し  
 者事とて公に述るる故に此陸彦彦事申初面と太老

[illegible]





太公係在唐進  
 右通外二面有文甲

けり長上つ事辛未丑月二日猛打々江戸巡見以て大久保  
とろく正出有相極きといふ言一樹の松と此流とも歟登馬  
い局安となまつるをこゝに上

土月二日

小篆 掃趙陵

いふはく、何れも、ぬち、わたり、半、うゑ、ハ、丁、字、に、親、と、付  
ふ、と、わ、の、二、氣、お、の、と、どう、や、ま、り、ぢ、ぢ、ぬ、ち、代、の、米、近、も、た、も  
に、わ、ふ、と、常、り、ち、ぢ、ぬ、ち、と、が、と、ま、ふ、ぬ、ち、の、為、の、得、得、地  
と、わ、り、と、ま、ふ、と、

五月二日

李休復判

此事と決て有て考出ると言にハ我れもと入りし事ぞ知るべし  
 我方一如りたるハ先君の御遺言を承りて之を以て之に  
 方ふきに相むべしと宣ひたまはれども曰く何ぞ老中の方には  
 一が罪多やあるべし 惟阿弥を祈りて之を免れん  
 此れと名し之の枝へ身振るといふべし 此の法を以て守り  
 たるに掛く 此君の御遺言を承りて之を以て之に  
 一が罪多やあるべし 惟阿弥を祈りて之を免れん  
 此れと名し之の枝へ身振るといふべし 此の法を以て守り  
 たるに掛く 此君の御遺言を承りて之を以て之に  
 一が罪多やあるべし 惟阿弥を祈りて之を免れん



其の人のなまにたはと大に感ふるを其の年内の事  
 見廻しぬるもたし多き事なれど此の事とて其の事  
 多しとて其の事多しとて其の事多しとて其の事  
 多しとて其の事多しとて其の事多しとて其の事  
 多しとて其の事多しとて其の事多しとて其の事

其の人のなまにたはと大に感ふるを其の年内の事  
 見廻しぬるもたし多き事なれど此の事とて其の事  
 多しとて其の事多しとて其の事多しとて其の事  
 多しとて其の事多しとて其の事多しとて其の事  
 多しとて其の事多しとて其の事多しとて其の事

入 購 入 古  
 本 本 本 本  
 明 治 三 十 八 年 四 月 十 六 日  
 紀 元 二 千 五 百 六 十 五 年

